
魔剣打ち

壊乱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔剣打ち

【Nコード】

N2176F

【作者名】

壊乱

【あらすじ】

あの雨の日、長い旅は始まった。彼女が消えたあの日から。

プロローグ（前書き）

灼眼のシャナ再構成です、オリジナルキャラが出てくるので嫌いな方は、気を付けてください。

小説書くのは、初めてなので、至らないところがあるかもしれませんが。どうか、温かい目で見守っていてください。

プロローグ

私は人ではない化け物だった。

今も人間では無い。

しかし、化け物でも無い。

歩いては行くことの出来ない隣からこの世界に来た時。私は他の同類と同じ、化け物になっていただろう。

彼女に出会うという奇跡が起こらなければ。

私は彼女を愛した。俗に言う一目惚れだった。

私は人を喰らう事無く、そして帰ることもせず、この世界に在ることを選んだ。彼女の隣にすることが私の願い。

人の命の長さは変えることはできない。だからこそ私は彼女が果てるまで共にいたいと願った。そうただそれだけが私の願いだった。しかし、

彼女は

彼女という存在は

消えて無くなってしまった。

まるで最初から無かったかのように。

あの雨の日に…

私が仕事から帰った時、家には人の気配が無く、とても静かだった。いつもなら私を出迎えてくれる、彼女の姿も無く。異様な静寂が辺りを支配していた。嫌な予感がした、胸を締め付けられるような暗い予感が。

私は彼女を捜した、リビングを寝室を家の中の部屋と言う部屋を、そして庭への扉が開いていることに気が付いた私は転がるように飛び出した。

視線を巡らし、その視界に雨に濡れる彼女の姿を捉えた私の心は一瞬安堵に包まれたしかし、それはすぐさま永遠の絶望に変わった。

そこにあっただのは、彼女の“燃え残り”だった。

あの雨の日世界は絶望で黒く染まり、私の心に闇色の火が灯った。

旅は始まった。

第一話 とある日常（前書き）

かなり時代が飛びます。性格が違うのはそのせいです。

第一話 とある日常

薄暗いカーテンの閉め切られた部屋のなかで、寝ぐせがすごい頭をした男が目覚ました。少しだけ赤みがかった黒髪、けだるげな、黒に火の粉を散らしたような瞳。その男は日の射し込む窓を見てこう呟いた。

昔の夢…。

今日は嫌な一日になりそうだ。

この日、俺こと赤夜 紅里はなかなか幸運だった。

珈琲の懸賞に当たり、無くしたと思っていた、オルゴールを発見し、星占いで1位だったりと。

良いことが続き、俺はそれなりに上機嫌で仕事に向かった。幸運過ぎることに一抹の不安を抱えて。

今、向かっているのは、職場である御崎高校だ。俺はそこで1年2組の担任をしている。いつもならもう少し遅く出勤するのだが。最近、学校の近くで通り魔が出没している関係で、職員会議が行われる、俺も職員であるからして出なくてはいけない。

正直大して意味があるとも思えなかったが、これも仕事と諦めて、早足で学校に向かった。

結局と言うか、やはりというか職員会議では大した案はです。下校後の見回りをするが決まった程度だ。で、何故かこの仕事を俺がやるはめになった。…まあ、その分他の仕事を減らしてくれる、と言うので、引き受けたのだが。

そんなことを考えていると、そろそろ朝のHRが始まる時間だ。教師が遅れては格好がつかない、俺は少し足早に教室に向かった。

時間ぴったりに教室に到着した俺は、一度だけ深呼吸をしてから、中に入った。

俺が入ってきたことに気付かない鈍い奴数人に、席に付くよう言いながら、俺は教壇に立つ。

皆が静かになるのを待って、日直が号令を掛ける。

「起立、気を付け、礼、着席」

とりあえず出席をとり、朝の連絡を始める。

「みんな知ってると思うが、最近この辺りに通り魔が出没している。だから学校が終わったら、寄り道せずに、直ぐに家に帰ること、いいな。」この言葉に答えたのは数人、

それ以外は聞かずに、友達と喋ったりしている。しかも聞こえて来るその内容が、放課後に遊びに行く話なので、釘を刺す意味でこつと言った。

「言い忘れたが、先生達が見回りするから。もしも、見つけたら。明日、一時間説教してやるからな、そのつもりでいろよ」

今度はみんなが聞こえていたらしく、教室はブーイングで一気にうるさくなった。俺はそれを無視してHRを終わらせ、教室を後にした。

放課後、予告通り見回りをしていたわけだが。駅前のCDショップの前で、意外な二人を発見、捕獲した。

「さて、何か言い訳はあるかな、平井、坂井。聞いてやっても良いぞ。」後ろから、逃げられないよう、がっしり肩を掴み、聞こえるように耳元で言った。二人は最初まるで聞こえなかったかの動かな

かったが。

ゆつくりと油のきれたブリキのように、こつちを向いた。

「せ、赤夜先生。」

「えっと、これはその」

「なんだ？」

につこりと笑って聞いた、それだけで二人は言い訳を諦めた。

「す、すいませんでした」

「別に謝る必要はないよ」

「え、それじゃあ…許して…」

平井が期待に満ちた目でこつちを見る。しかし

「結局は明日叱ることになるわけなんだから」

平井の首がぐーんと落ちた。心なしか、えぐえぐと泣いているように聞こえる。

坂井の方はあきらめているのか平井をなぐさめている。そんな二人を見ながら少しだけいたずら心が騒ぎだす。

「しかし、お前等が付き合っていたとはな、知らなかった」

平井は一瞬キョトンとしたが、すぐに顔を赤くして叫びだした。

「ち、違います！坂井君とはぜんぜんそんなんじゃないありません」

力いっぱい否定する平井の横で、坂井がひきつった笑顔で笑っている。まあ、あれだけ否定されれば、年頃の男の子だ無理もない。

「いや、わかったからその辺にしておいてやれ」いい加減坂井がかわいそうになってきたのでさっきから顔を赤くして抗議を続いていた平井を止める。言われて平井も気付いたのか坂井に謝っている。その姿をやれやれとため息をつきながら、これだと恋人にしか見えないだろうと思った。

このままだといつまでも終わらなそうなので、こちら辺で二人を帰

そうと俺は声をかけようとした。

「からかわれたくないんだったら、ちゃんと先生の話を…」

その時普通とは違う俺の感覚が、世界の異常を察知した。

「先生？」

これはマズイ！

「来い！」

二人の手を掴む。

「えっ」

「きゃっ」

そして俺は境目へと走る。

しかし、無情にも目の前で陽炎のように歪む壁が世界を紅く閉ざす。

「くそ、間に合わなかったか。」

「せ、先生、これって、一体。それに平井さんが…」

坂井は周りを見て言う。

「坂井、動けるのか？」あまりの驚きに、分かりきったことを聞いている。知らない奴が動けるはずが…、普通じゃないのは知っていたが。ここまで来ると異常だ。

しかし、今は考えている暇がない。

「坂井、悪いが事情を説明している暇がない、平井は大丈夫だ、とりあえずここを動くな、話は後でしてやる。」

「え、ちょ、」

俺は答えを聞かず、走り出した、俺の日常を壊した元凶を、消し去るために。

第一話 とある日常（後書き）

何か一言感想をお願いします。

第二話 もう一つの顔（前書き）

戦闘になると、一人称が俺から私に変わります。間違えたわけでは
ありませんのであしからず。

それから、文句でも言いで感想を一言お願いします。

第二話 もう一つの顔

俺は走った。

さつきとは逆の方向に、紅く切り取られた世界の中心に。そこにいるはずだ、この空間を創った奴が。

CDショップを通り過ぎた少し先の繁華街にそいつらは居た。

一つはマネキンの頭を固めたような、首玉。もう一つはどこかのマスコットキャラクターを大きくしたような、人型。どちらも大きさが、普通の人間の二倍はある。

そいつらの周囲には誰もいなかった。この通りは人通りが多く、いつもならば駅に向かう人でごった返しているはずなのに。

私はここにいた者がどうなったか知っている。喰われたのだ存在を、彼女のように。私は拳をきつく握りしめ、そこにある二つの存在をにらみ付けた。

どうやら相手も私に気が付いたようだ、こちらに向き直って、話し始めた。私がどういった存在なのかはかりかねているようだ。

「ん？なんだい？こいつ」

「さあ？御”徒”……ではないわね」

「でも”封絶”の中で動いてるよ」

「多分”ミステス”ね……それもとびっきりの変わり種と言つこと

かしら。久しぶりにうれしいお土産ね。ご主人様もお喜びになるわ」
「やった〜ぼくたちお手柄だ〜」

そこまで聞いて、私は拳の中にあるものを握った。
そして、人型が私を捕らえるために伸ばした腕を、切り落とした。
人型はそれを見て、声も出せずに呆然と腕の断面から薄白い火花が
散る様を眺めている。

「うああああ！ぼ、ぼくの腕があああ」

人型がわめきだす、はつきり言って耳障りだ。

「黙れ」

底冷えするような威圧感を発しながら命じる。
人型はその一言で一度は黙る、だがすぐに、

「よくもぼくの腕をを、潰れちゃええええ」

残った腕を振り下ろして来た。
しかし、

「黙れと言った」

それに対して私は、手を一振りした。それだけで私を押し潰そうと
振り下ろした腕は転げ落ち、さらに両足も切断された。

人型が崩れ落ちる、それを見た首玉が体当たりをして来るが。それ
も、思い切り蹴り飛ばして黙らせた。
そして、人型に向き直る。

「さて、おまえには聞きたい事が……？」

人型は喋らない。いや、よく見ると人型の目に力がない、存在の力もかなり減っている。まるで張りぼてだ。

「チツ、本体には逃げられたか」

逃げ足のあまり速さに舌打ちをしたその時、

「うあああああ」

坂井の悲鳴が聞こえた。

「しまった！」

私は悲鳴の方へ、駆け出した。

第二話 もう一つの顔（後書き）

次こそは、シャナを出したい。

第三話 決着（前書き）

なんとか、シヤナに出会わすことが出来ました。次はちゃんと会話をさせたいです。

第三話 決着

叫び声の聞こえた方へ、風のように速く私は走った。

遠目に坂井が見えた時、その近くには平井以外に二人の女が居た。

一人は坂井の後ろにいる女、長い髪をした、美しい女性だ。しかし、それは見た目だけ、あれは逃げたはずの人型の中身だった。

そしてもう一人。揺れれば火の粉が舞う腰まで届く炎髪、赤く燃えるように煌めく灼眼。そして、高いとはいえないが少女だが、それでもその背丈よりも長い長刀。その姿は自分の知る人間によく似ていた。

そして、少女は手に持った長刀を振り上げ、坂井ごと、後ろの女性を切った。止める間もなかった。肩から腹の辺りまで二人とも切られている。しかし女性の方は中が空洞でそこから、粗末な人形が飛び出した、人形は空中で一度振り返るが、そのまま逃げて行った。あれが本当の本体だったようだ。

私は少女に近づいた、少女は坂井を炎で治した処だった。少女はこちらを向くと、不意に首からかけた黒い石を、交差する金のリングで結んだペンダントに話しかけた。

「アラストール、これ何？」

「ふむ、トーチではないようだが……」

奥歯がギリと鳴った。ペンダントから聞こえる声、その声には聞き覚えがあった。忘れたくても忘れられない、嫌な声、遠雷のように重く低い、男の声。会いたくなかった、出会えば殺したくなる、元親友。

「黙れ」天壤の劫火」「！」

「！」

何でよりもよって、こいつが来るのかと叫びたくなった、これも因果だと言ふのなら、因果とはなんて皮肉屋なんだろうか。

「お前一体……」

少女が呟いたその時、ビルの中から壁を突き破り、首玉が飛び出してきた。それを見て、坂井はなにやらめきながら慌て、少女は冷静に先ほどの長刀を取り出し、迎撃の構えをとる。

しかし首玉は私めがけて突っ込んでくる。私は有らん限りの憎しみを込めて、首玉をにらむ。そして手に持ったままだったものを肩に担ぐように構え、そのまま首玉にの方を神速の速さで切った。

何も持たないまま、たとえ剣を持っていたとしても届かない距離で、手を振り下ろした。よくわからない事をする男をいぶかしく思ったが、首玉は止まらない、少女が長刀を振りかぶる、その必要はなかった。首玉はその進路を少しだけ曲げ、誰にも当たらずに通り過ぎていく、少女が振り返ると、二つに割れ火花となつて散じていく、哀れな首玉の姿だった。

第四話 出会いと再会（前書き）

感想を、感想をお願いします。一言でもいいですから

第四話 出会いと再会

少女は目の前にいる何なのか、よくわからない存在をただ黙って睨み付けている。

赤夜紅里はその少女を睨み返している。

坂井悠二は何がどうなっているのか訳が分からなず黙っている。

平井ゆかりは哀れにも忘れられていた。

誰も喋ることのできない、普通の人なら逃げ出したくなる重い沈黙。それを破ったのは紅い少女だった。

「お前は…、何だ」

赤夜に向けてはなった言葉だった、これは少女が今一番聞きたい事。しかし目の前の得体の知れない男が返した答えは、少女を納得させることは到底不可能だった。男はこう言った。

「お前に…、天壤の劫火の契約者に話すことはない」

少女のイライラが高まったのは、誰の目にも明らかだった。

そんな、少女を見て少し引く悠二だが、一応言っておかなければいけないことを言うことにした。

「あ、あのさ」

少女に向かって、声をかけたのだが、少女はこちらを見ようともし

ない。

「えっと…」

その様子を見て、赤夜紅里は心の中でだけため息をついた。その行動にあまり意味がないことを知っていたからだ。

「まあいい、とりあえずここでもこうしていても、どうにもならん。勝手に直させてもらっぞ」

そう言つて、私は掌を空に向ける。幸いここには喰われた人間はいない、傷を負った人は治す事が出来る。しかし、繁華街であいつらに喰われてしまった人間はトーチにするしかない。人の傷は治し、向こうにもトーチを配置する。次に破損した箇所を直す。まるでビデオを巻き戻しているように破片などが元の場所におさまっていく。

「さて坂井、説明は少し待て、平井を家に帰さないといけないからな」

「あ、はい」

「それから、お前」

「…何よ」

少女はかなりイライラしているようだ、目つきがさっきよりきつくなっている。

「とりあえず何もせずに見ている、邪魔をするなよ」

その言葉に対し、少女は睨み返すことで返す、バカにしているのかとその目が言っている。

「ふう、まあいい解くぞ」

そう言って私は指を弾く。紅い世界は碎け停止していた人々は動き出す。

「先生、いきなり引つ張るなんてひどいよ」

平井はプンプンと怒っている。赤夜はさっきまでの鋭い顔はどこかへ置き。何時もの先生に戻っている。

「いや何、ほかの先生がいたものでな」

「それで何で逃げるの？」

平井は分からないという顔をしている。

「お前等をからかって終わりにしてつもりなのに見つかったらごまかせないだろ」

「え！それじゃあ」

「ああ、かえって良いぞ」

「やったー、それじゃあ先生じゃあねー」

平井は手を振りながら走って行く、それを見ながらうまくごまかせたことに安堵する。

「さて」

二人（三人？）を振り返る。

「ここで話すのも何だし、少し歩こうか」

顔と口調は優しげなまま、目だけ鋭く言った。

第四話 出会いと再会（後書き）

不定期に更新したり、一部文章を変えたりしていますが、報告はしないので、時々読み返してくれるとうれしいです。

第五話 世界の真実（前書き）

かなり難産でした、最終的に一度全部書き直しました。更新がかなり間が空いてしまい申し訳ありません。これからもこう言うことがあると思いますが、見捨てるずにいてくれるとうれしいです。

第五話 世界の真実

歩きながら、俺は坂井に世界の裏側について説明した。その中にはもちろん坂井自身の事も含まれていた。

「僕がもう死んでいる？ 先生…、嘘…ですよネ？」

坂井は余りにも辛い運命を受け入れる事が出来ないらしい、情けないと言えば情けないが、仕方なくもある。突然自分が死んでいると言われたところで、信じられるはずがない。

隣を歩きながら甘い物を買って食いついている、今は髪が黒くなった少女はと、その契約者はそこら辺を理解できないらしいが。

「嘘ではない、本当だ。おまえはトーチと呼ばれる、世界への衝撃を和らげるための代替物だ」

「そ、そんな…」

坂井は明らかな落胆の声を上げ、こちらを見る。しかし、何を言おうと死んでしまった人間は戻らないし。トーチは人間にはなれない変えようのない事実なのだ。だから

「だからおまえは関わるな、どうせ長くはいられない、ならせめて日常の中で生きろ」

これが俺の出来る精一杯、消される前に助けられなかった俺の出来ること。

坂井はそこで別れた、少女も同じ方向へ歩いていった。少女はこちらを強くにらんでいたが無視する。

おそらく坂井を囚にでも使うつもりなのだろう。やめると言ってやめるような奴がフレイムヘイズをやっているわけがない。だがそれは同時に坂井を守ると言うことだ。ならば言うことはない。しかし…

「はあ……」

出来れば坂井には、話したく無かった。何も知らずに消えた方がまだいい。話した奴はほとんどが気が狂うか、自殺するか……。何にしても受け入れる事は大変だ。

これからのことを考え、またため息を吐き。

俺は帰路へとついた。

灯りのついた玄関のドアを開け、家へと帰宅する。

俺の家は敷地面積は狭いが、その分ギリギリまで土地を利用した。地下一階、地上二階建ての一人暮らしをするには十分すぎる広さがある。玄関で出迎えてくれるのは、猫三匹犬一頭の計四匹の動物たちだ。

黒に茶色の混じった毛並みをした犬のベンは、元々は捨て犬で、さまよい歩いているところを拾ったのだが、最初中型犬位の大きさですでに大人だと勘違いしていたのだが、拾ってから半年でグンと大きくなり。慌て調べると実はベンはバーニーズ・マウンテン・ドッグと言う種類らしく、超大型犬に分類される。最終的に子供を乗せて歩けるくらいにでかくなった。まあ、いつも勝手に散歩に行つて、いつの間にか帰ってくるようなマイペースな奴だから、余り手間はかからなかったのだが。

最近ではベンだけで散歩していても、騒ぎになるということもない。そのベンは、のっそりと近づいてきて、足に頭をこすりつける。他の猫たちも、まねるようにこすりつける。その姿はまるで親子のようだ。青い目に黒い毛並みのオスがブルー。黒と白のぶち模様のメスがベル、名前の由来はお酒のベルモット。そして、黒の虎柄のメスがティ、名前は英語の tiger から。

この三匹実はベンが拾ってきたのだ。

ベンは鍵をかけて家を出ても、鍵を自力で開けて散歩に行くマイペースな犬だが、基本的に日が暮れる前には帰ってくる。それがある

日、日没後かなり経ってから帰ってきたことがある、その時くわえていたのがブルーだ。それからベンは、時々動物を拾ってくるようになった。雀をくわえてきたり、猫がいつの間にか増えていたり。そのせいで食費がだいぶ増えた。

まあ、見捨てる事の出来ない俺が甘いともいえるのだが。

ベンの頭をなでて引き離し、靴を脱いであがる。リビングに行く前に、地下のワインセラーから何本か掴んでから二階に上がる。

今日は素面でいたくない。

ちなみに、一階は風呂と物置、二階はリビングと寝室、それとトイレ、地下にはワインセラーなどがある。

二階につくと猫たちとベンに餌をやる。そして、自分は冷蔵庫から酒のつまみにチーズを取り出し、グラスを持ってソファに座る。

今日の事を思い出す。

かなり嫌な一日だった、特にあのアラストールとその契約者に会ったのは最悪だ。なぜよりもよってあいつ等がこんな極東の島国に…。

「はあ、これも因果か」

まあ何も良いことがないわけではない、この町にいる徒も今までは燐子を使って、姿を表さなかったが。フレイムヘイズが来たと知れば、何かしらの動きがあるだろう。

そこを叩けばいい。

「…しかし、やはりあいつ等である必要はないだろう。…はあ」

この日、もう何度目かになるため息を吐きながらグラスを空にした。

第五話 世界の真実（後書き）

ペットは趣味です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2176f/>

魔剣打ち

2010年10月21日23時32分発行